
吹険！～吹奏楽部×ファンタジー！？～

碧。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吹険！～吹奏楽部×ファンタジー！～

【Zコード】

Z5148Z

【作者名】

碧。

【あらすじ】

田を覚ますと、そこは異世界だった　世界を救うのが中学生の吹奏楽部でいいんですか！？　とにかく、いざ冒険に出発です。

アウフタクトー（前書き）

Fantasy in the permission!-?の元の作品です。

前の作品を読んだ方で嫌だな、と思つた人は氣をつけてください！

アウトタクト1

どうも、嘉田です。『Fantasy in the Percussion』の元ネタ、この『吹険!』では二学年下としてのキャラとなりますがまあよろしくお願ひします！

とりあえず主人公メンバーはパークスメンバー四人ではなくなります。うちが一年としての設定なんでパークスメンバーは何人か出てきますが、「パークス」が主人公ではないですね。

まあ、これからもよろしくお願ひします！

突然異世界の揉め事へ巻き込まれた者達は。

「地球」では出会う事の無かつただろう者達で。

見つかる事の無かつた運命を見つけるだらつ。

初めて出会った者同士はその出会いを喜び。

以前から共に居た者には、新たな発見をする。

その「運命」は呪うべき物なのか、祝うべき物なのか

「成実、皆はどう?」

「それが、居ないんだよ」

気が付いたら知らない場所に居ました。

今の現状はその一言に尽きますね。

事の発端は多分、ほんの数分前のこと。

うち達が先生に頼まれて学校の倉庫に物を取りに行つたのが原因、なのだろう。

上手く、思い出せないけれど……数分前の事なのになんでなんのかな？

アウフタクトー（後書き）

パークッションでなく、吹奏楽部全パートが出ます。
設定は少し変わっていますので、ご了承お願いします。

アウフタクト2（前書き）

一話目です。そして、超・ぶつ飛び・展開です。

アウトタクト2

＝？？？＝

「長老　！」

一人の少年が街の外れにある家へと駆け込む。

「大変なんだ、女王様が……っ」

「知つておる」

少年　トオイに長老、と呼ばれた老人は水晶球を覗いている。

「全てこれで見ておる。　突然女王は何をいいだすのじゃ……！」

「

「なんで、急にあんな事を」

この世界の女王、アリーチェ。彼女は最高の女王、だった。

アリーチェに世界の住人が出された条件は、

『自分の気に入る演奏をすること』

それだけならまだ良かった。

『但し、少人数での演奏は不可。一ヶ月以内にそれが叶えられない場合』

『叶えられるまで、一週間ずつ税を上げていく』

それが、幸乃達の世界なり。

簡単な事だつただろひ。

しかし、この世界は、幸乃達の世界で言う、「合奏」を知らない。

音楽の世界、とは言えど、「趣味」に近いのだ。

バンド程度の人数のものはあるが、オーケストラといった、多人数の合奏は知らない。

一ヶ月なんて短い間では、楽譜を作るだけで時間が過ぎてしまう。

女王の満足できる演奏は、できない。

「女王が別人になつたとしか思えん命令じやな」

「どうしよう、無理だよ……！」

「わしに考え方がある。少し待つとつてくれ」

水晶球を持ち、立ち上がる。

「異世界に道を開き、それができる者達をこの世界に連れてくる

「え？」

「助けを求めるのじゃ。異世界の者達に」

水晶球に手をかざすと、それは薄暗く光った。

『 我、異世界の者を呼び出す。汝、その声に応えよ』

瞬間、太陽のように水晶球が輝いたかとおもひと、

衝撃が長老を襲つた。

「長老！」

「いたたた……大丈夫じゃ、これで呼ぶ事には成功したはずじゃ」

「でも長老さうきうちまで振動がきたのに……本当に大丈夫？」

「まあな。この魔法は一年経たんと使えんが……本当に大きい魔力が必要じやからな」

異世界から異世界の者を呼ぶ、といつ行為。

それだけ、魔力の消費が多い。

「魔力の回復もできんしな。あとは時間を止める魔法をかけるか」

「長老まだ魔力残ってるの！？」

「まあな。だが……時間を止めてしまえば、もう魔力はほほりじゃな」

だが、止めなければ、異世界で不都合が起っこつてしまつ。

長老は、もう少しで閉まりそつた、歪みに向かつて、魔法を唱えた。

「これで大丈夫じゃ」

「ねえ長老、その人達大丈夫かな？」

「すぐに街にやってくるじゃろつ。だから迎えに行くぞ」

「分かつた！」

一人は家をでて、街の中央の広場へと向かった。

「この世界の希望となる存在と出会いのために。

アウフタクト3（前書き）

ようやくプロローグ的な何かが終わります。

アウトタクト③

「成実」

「何?」

「一つ聞きたいんだが、リリヤがいつ来て来たんだっけ?」

「……覚えてない、の?」

「うん、なんか。成実はどう?」

「覚えてるよ。しっかりと」

その返答に、うちは首を傾げた。

「なんで覚えてないんだろう」

「じゃあ、話したら思い出すかもしけなしし説明しようつか?」

「お願い」

「どうあえず……僕達が先生に頼まれて体育館裏の倉庫に行つたのは覚えてる?」

「うん。あつ」は学校の七不思議に数えられてるんだよね。あれは怖かった

薄暗い、体育館裏の倉庫。想像すると背筋が凍る。

先生は七不思議の噂を知らないから……大丈夫みたいだけね。

「なんだっけ、楽譜を取りにいったんだよね。入ったところまでは覚えてる」

「正解。じゃあそこからかな？」

倉庫には今まで使われてきた楽譜も置かれている。

音楽室に置くスペースが無いので、ファイルに閉まって倉庫に整理されているのだ。

代々残されてきていて、捨てるわけにも行かないのである。

うち達は、先生に頼まれて『Let's swing』の楽譜を取りに行つた。

「僕達が扉を開けたら、倉庫の中が歪んでて、次の瞬間僕達はその歪みに吸い込まれちゃった　って所かな？　どう、思い出せた？」

「

「うーん……あんまり。」めん

「別にいいよー。それより皆を探さないと。とりあえずこの場所に行つてみない？」

指差された看板。そこには「animate」と書かれていた。

「それがいいかも。多分街だよね

「じゃあ行こうつか」

うちと成実は他愛も無い事を話しながら看板の指し示す方へ向かつた。

この世界の一大事に巻き込まれるとも知らずに。

アウトタクト3（後書き）

さて、次はanimate。いちいち街の名前をアルファベットで打つのがめんどくさくなつてきます。

一般吹奏楽部員なんですか？（筆者も）

はい、もうやく本編（^ω^）です。

一般吹奏楽部員なんですけど

「は、ハロー……」

「嘉田さん、この人達英語で喋つてないから」

ただいま、うち&成実、絶賛囮まれ中。

道なりに歩いてきて、「animate」って街についた瞬間これだよ！

「貴様等、何者だ」

しかもその囮んでいる人つていうのが鎧着て槍持つてる兵士さんでさりにピンチ。

「えーといひ等もなにがなんだか分かつてなくてですね」

「そうか。捕らえろッ！」

兵士達の隊長らしき人の一言で、うちと成実はそれぞれ別の兵士に捕まえられる。

「そいつらは怪しい。何をしでかすかわからんからな、引き離しておけ」

「はッ！」

するすると引きずられ、引き離される。

「成実いつ！」

「嘉田、さん！」

叫び、もがいて暴れるが、大人の力に適うはずも無く。

しばらくすると、成実は見えなくなつてしまつた。

「（いきなり処刑とかは無いよね……皆も探さなきや、なのに）」「そんな事を考えながらも引っ張られ、何も分からない所へ連れてかかる。

「待たんか！」

突然、そんな声が聞こえた。

広場のようなそこには、大勢の街の人の前に、老人と少年が立つていた。

「その者はわしの知り合いじや。離せ」

「はー? し、しかし」

「離せと言つている。そんなに我が魔法を喰らいたいか?」

「わ、分かりました」

「え? うわっ」

突然離され、バランスを崩す。

「大丈夫かの？」

「お蔭様で…だけどなんで助けてくれたんです?」うち貴方の事知りませんけど」

「それはじやな、わしがこの世界に君達を呼んだからじや」

「は?」

「この世界を助けてほしにのじや」

「え、」

「詳しげ話はわしの家でしょ?。トオイ、行くぞ!」

「え、ちよつと待つて! 成実がまだ捕まつてゐる…」

「もう一人捕まつておるのか! こいつてはおれんな。トオイ、行くぞ!」

「はい!」

三人でまづはさつきの所まで戻る。

「確か、こいつの方行つてたよ?」

しばらく走る。トオイ、と呼ばれた少年は居るが、長老は居ない。

しかし、気を配っている暇はない。

「届ましたっ！」

少年の声。指が指示している方を見ると、確かに成実がいた。

「（成実）ーー」

声は出ない。助けよつと、飛び出さうとする。

「あ、待ってくださいー！」

瞬間。

「か、はっ」

兵士の拳が、成実に思い切り当たった。

「なる、み……っ」

「待つてくださいーー！のままでは貴方もまた捕まる。長老が来るまで待たないと……、」

ひの意識が、だんだんと暗くなっていく。

「待つてゐる暇あるかよ、俺が行つてあいつらぶん殴つてくれる

「ーー？」

少年の顔が驚き一色になる。そして、つかの意識は完全に消えた。

奪還と説明（前書き）

幸乃の二重人格幸斗登場。
唯の吹奏楽部の子が二重人格つて
変ですよねー。

「つたく幸乃にまかせたら危ねえからな。」

幸乃を無理矢理押さえ込み、前に出る事が成功した。

「なあ、お前棒とか無いのか？」

隣に居た年下だらう男に話しかける。

「持つてない……」

「そうか。すまん。じゃあ逃げるしかないな。広場まで逃げて
る」

「へ？」

ぐ、と足に力を入れ、走る。

「俺」で居れば幸乃以上の力を出す事ができる。

成実!」とにはなってしまったが、蹴りを兵士に叩き込む。

兵士は油断していたのだろう、簡単に倒れてしまった。

「おい成実、逃げるぞ!」

「え? もしかして幸斗なの?」

「まあいいからとにかく来い。逃げるからな」

とにかく走った。広場まで逃げた後、さつきの一人と合流した。

入り組んだ道を案内され、街の外れの長老の家だという場所まで来た。

「……あーそろそろ幸乃に戻るから成実、幸乃頼んだ」

分かつた

「今回俺出てきたのある意味お前の所為だからな一氣をつけてくれ

L

「うん。頑張るよ。」
「ごめんね。」

幸乃の意識は戻っている。

俺は幸乃の奥に引っ込んだ。

۱۷۰

意識が戻つて少しして、幸斗が奥に戻つた。

ରାମପାତ୍ର ରାମପାତ୍ର

成実が居るつて事は、とりあえず幸斗が何かしたんだと思うけど。

「幸乃だよねー？」

「ん。幸乃だよ」

「とりあえず説明をしてくれるみたいだから。『』は長老さんの家らしいよ」

「あー……そりこいつ」とね

「とりあえず見つかつたらなんじや、入ってくれんか」

「「はーい」」

一人で返事をして、家のなかへと入る。

「そこにかけてくれ」

指差された場所に座り、一息ついた。

「さつきひづ等を呼んだって言つてましたけど、どりこいつとですか？」

「『』の世界の一大事だからじや」

それから説明された事は、信じられない事の連續だった。

「待つてくださいーなんでそんな女王がいきなりそんな事をー!?」

一番怪しい、と言づか疑問に思つた事を問つ。

成実も隣で頷いている。

「分からんのじゃ。本当に突然でなあ……」

「つていうかゼリフしてうち達なんですか。もひとつ上手い人は他にいるのに」

「同じ楽譜を覚えているかもつてこねばずじや」

同じ楽譜? なんだゼリフ。

「他にも何人か呼んでいるから、その人達もきっと覚えているじやる」

「その楽譜つて……なんなんですか？」

成実が問う。

「わしにも分からん。楽譜自体もあまり分からんしな」

「ゼリフ、ですか……」

「とにかく、皆を見つけないといけんな」

「他人たちはゼリフにいるんですか？」

「この世界に散り散りになつてるよつじや。探しに行つたほうが多いい」

「でもまたあの王国軍に会つたら……」

「中國軍に仕事話をつけておぐ。あれど、武器を渡すが」

え、武器つて……誰かと戦うの?

中國軍と仕事話をつけてくれるんだったたり、誰といへ

「リリはモンスターがでるからな」

……え?

そ、そんな危険な事に巻き込まないでーっ!!

奪還と説明（後書き）

なんとか……逆でしょ、逆……
男子が幸斗状態とは言え女子に助けられたやついましたよ。
書いてるの私ですけどねえ

わね、出発？（前書き）

設定が酷いのはできればスルーをしてください。……。
あ、でも我慢できないほど酷かつたら文句を言つてやつてください。

わあ、出発？

「つていうが、つか等楽器持っていないんですね」

「安心せ。樂器はわざとある」

辰巳は立ち上がり、奥の扉の前に立つ。

廿二は、多くの樂器があった。

「へいわ……」

「あ」いねえ……」

「」から集めてきたのだと、壁にある大量の樂器に、二人して絶句する。

「」の世界の樂器は特殊でな

小さな盾をたて、トランペッタを掴む。

「これは……なんじやつたかの？」

そんな言葉が呴かれる同時に、トランペッタは小さなナイフになつた。

「「？」」「

「」なんが、武器に変化するのじや。何故かはわかつとらんが

の」

「武器として使つても楽器としては傷つかないから安心なんだよー」「えりと、つまつ自分の楽器としては傷つかないから安心なんだよー」といふことですか。

「分かりました。じゃあ他の人と会つたらまた戻つてきたほうがいいですよね」

「じゃあつな。案内役として、トオイが共に行つてくれれる」

「お願ひします」

「こやこや、いかがわせ願いね」

「とにかく、まずは楽器を選ぶのじゃ」

大量の楽器を見ぬ。つかパーカスなんだけど、スネアとか持つてこべの?」

あ、もしかしてステイックとかが変化するのかな。

すきな楽器は鍵盤。だから、良むけつなマレットを手に取つた。

武器になれ、と念じると、一組のマレットは、槍に変わつた。

「えむ……でも楽器で戦つ事に抵抗感が」

「あのね、楽器は武器に変化してゐるぢゃなくて、どうかに武器が

ある空間があつてそこに楽器を移動させて変わりに武器をつていつ
考え方もあるから大丈夫だよ」

「うーん……そういうもんかな」

苦笑いをして、軽く槍を振る。マレットも一度いいし、槍はいつも
的に使つてみたかった武器だ。

そこで成実が気になり、成実のほうを見る。

「うーん……色々あるなあ

まだ考え中のことですね。成実はトランペッタの前で腕を組んで
いる。

あんまり管楽器のことば知らないから分からないけど……

やつぱり一ひとつどこか違つんだらうね。

「ちょっと吹いてみるね」

ポケットからマウスピースを取りだす。

……ああ。やつぱり自分のマウスピースがいい……って、

「なんでマウスピース持つてんの！？」

「え？ ポケットに入つてた

「ソウデスカ……」

約一十分後。成実は楽器を決めたようだ。

「僕の武器はワンドって言うのかな？ 魔法が使えるみたいだよ」

彼によれば、トランペットから変化したワンドを持った時、魔法がいくつか頭に流れ込んできたらしい。

「じゃあ準備もできたし、行きますか」

「そうだね。トオイ、道案内頼むね」

「はーー。」

長老の家を出で、歩く。少しすると、街の出口を見つけた。

「気をつけのじやぞ」

長老の見送りを受け、つちと成実とトオイ君、三人は当ても無いまま、出発した。

まあ、出発？（後書き）

武器が楽器……自分で書いといてなんですが人をかなり選びますかね？

自分で「武器と楽器は別物だから大丈夫」と言い聞かせてます（笑）

分かれ道なり。（前書き）

新しい街へレッジジャーのターンです。
ちなみに、トオイ君の楽器はサックスです。

分かれ道なう。

「出発したのはいいけど……」

「皆がどこの居るのかまったく分からないね」

animateを出発して数分 最初の分かれ道。

トオイによると、どれも街への道らしいが。

皆がどこのに居るかさえ分かればなあ。

「てれとに行きましょう」

「哪儿になんかあるの？」

「てれとには三人の『元帥』と言われる人が居るんです」

右手の指を三本立てる。

「それぞれ『ソプラテス』『アルトア』『テノエラ』と言つ方たちで、ソプラテスさんは『情報』、アルトアさんは『戦』、テノエラさんは『音楽』を担当しています」

「ソプラテスさんに最近変わった事が無いか聞いてみるつてこう」と?」

「哪儿にどう」とです、

「佐奈、政音先輩、仙里先輩大丈夫かな」

「大丈夫だと思うな。……皆、強いから」

三人が戦つてる所を想像する。

……ああ、確かに大丈夫そうだ。

「とにかく行つてみるしかないね」

「tri〇には何分か歩いたら着くと思います」

とにかく、情報を集めるのには最適の場所。

帰るためにも、皆と会つたためにもそこに行くしかないだろう。

トオイ君は、忘れ物があつたと、animateへ戻つている。

一人だけでしなければならない話があれば、今のうちだ。

彼はすぐ戻つてくる、と言つていたし。

「でもさ、成実」

「何？」

『『animate』『tri〇』これが示すのは?』

「音楽記号?」

「正解。じゃあ『ソプラノ』『アルト』『テノール』何を表してそう？」

「えっと、『ソプラノ』『アルト』『テノール』かな」

「そこ」で不思議に思った事が一つ。なんで時々出てくる音楽記号、うちの世界にある奴ばかりなんだろう

英語、イタリア語、フランス語、ドイツ語。交じり合っているとはいって似たような意味だろう。

「さあ……でもたまたまつてだけで、同じ意味とは限らないだろうから」

「まずは三人と会う、しかないわけだね」

もし、『ソプラノ』『アルト』の二人が女性で、『テノール』が男性だったら。

『ソプラノ』が声が高かつたりしたら。

『ソプラノ』=『ソプラノ』そういう式が成り立ちはしないだろうか。

「もしかしたら、成実」

「うん。この世界には……」

「思つているより大きな謎が隠されているっぽいね」

「そりだね。なんかレイン教授みたいだね」

「確かに」

「まあとにかく。歯を探す事が先決にしないと怒られちゃうしそうだね」

「あはは……それもそうか

「佐奈とか意外と怖いからね」

「え、本当？ 想像できない……」

「普段怒るのはいつもにだけだから」

「ちょっと見てみたいかも。……あ、トオイ」

成実は、少し見え始めてきたトオイに手を振った。

手を振り替えし、すみません、と言っているトオイ君に向かって。

つむぎも、大きく手を振った。

分かれ道なう。（後書き）

新しいキャラクターが名前だけ登場しました。
さて、どんなキャラクターにしよう……

祝、初バトル（前書き）

初バトルのターンです。
三対三のバトルです。

祝、初バトル

「皆さん、気をつけて！ 敵です」

「え、ちょっとまじでーーー？」

「とりあえず構えてくださいーーー！」

その声に、慌てて武器を構える。

最初から武器にしてあるので、その隙は無いはずだ。

「槍、か。使い方は どつかの国の鬼畜眼鏡の大佐か赤い武将さんと同じでいいのかな」

まあ赤い武将さんは槍を一本使っているが。

そこらへんはおじといで。

「トオイ君、あれはどんなモンスター？」

「あれはゴブリンです。少し素早いので気を付けて下わーーー！」

「分かった！ 成実、遠くで援護お願い

「了解、気を付けてね」

敵は、三体。トオイ君はモンスターとの戦いにある程度慣れてそうだけど。

「うち達は初心者。怪我なしは不可能、かな？」

『痛い思いはしたくない、けど。

ゲームやアニメ、小説で見たキャラクターのように戦える。

それが、少し面白ううともあって。

「うりゃー！」

素人なりに、キャラクターの動きを思い出しながら、戦う。

「『炎音の力、球となれ！ ファイアーボール』！」

成実の声。燃え盛る炎の球がゴブリンへと向かう。

「幸乃さん、味方の魔法なら、上手くすれば武器に属性を加えられます」

一本のナイフを握りながら、トオイ君が叫ぶ。

属性 か。威力が上がるのかな。

成実が一番使える魔法はさつきの『ファイアーボール』……だろう。

「おつけー。成実、『ファイアーボール』お願いつ！」

「ん！ 『炎音の力、球となれ！ ファイアーボール』」

炎の球が近くに向かつてくる。

槍をその球に思いつきつづけるように振る。

炎は槍に巻きついたようになつて。

「『炎舞』」

唐突に頭に浮かんできた言葉を告げて、円を描くように敵を攻撃する。

炎が消える頃には、成実の補助とで『ブリン』を一対倒していた。「炎舞」を発動し始めてすぐにトオイ君はもう一匹倒していたようだ。

「あつづうー……」

「大丈夫？」

槍の先だけとはいえ、何分か炎が近くにあったのだ、かなり暑かつた。

「まー大丈夫」

「なら良かつた。あ、後僕は今攻撃なら『ファイアーボール』と『アクアロール』が使えるからいつでも言つて。『アクアロール』の方は水だから熱くないと思つ」

「あつがとう。んじゃ次は『アクアロール』頼むわ

「僕もお願ひしますー」

「頑張るねー。トオイ君ナイフだから今は『アクアロール』じゃないと危ないけど」

「こうこうあつたけど、まあ監禁事で良かつた。

油断はできないけど。

「よつし、田端すばたけー。」

「むづしじしたらたれよ、見えてくると困こまやか。」

「まあ、じかこのは氣分つてことで

「幸乃らじこね。うふ、じゃあ行けー。」

田端すばたけー、皆の情報を集めて出発です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5148z/>

吹険！～吹奏楽部×ファンタジー！？～

2011年12月18日17時49分発行